

アイヌ語のもう一つの 1 Another Numeral Denoting 1 in Ainu

切替 英雄 (北海学園大学)

I 目的

いろいろな言語の数詞にみられる算術的構造¹の多様さは、個々の数詞の体系が文化により異なる過程を経て成立したことを示している。

そうした過程の一つとして、1を示す数詞が2の概念から生まれるということがありえたのではなかろうか。アイヌ語がその例だといえるのではないか。そのような仮説を立てて、アイヌ語の1を示す、今まで触れられることの少なかったもう一つの数詞の成立を跡付けることにした。

II 基本数詞

アイヌ語には次の基本数詞がある。

1 *siné*, 2 *tu*, 3 *re*, 4 *íne*, 5 *askíne*,
6 *iwán*, 7 *árwan*, 8 *tupésan*,
9 *sinépesan*, 10 *wán*, 20 *hót*

このうち2 *tu* と3 *re* が後接語(前倚辞 *proclitic*)であること(*setá* 「犬」、*tu séta* 「2匹の犬」。*tu séta* ではアクセントが一つ前に移動している)、4 *íne* が例外的なアクセントを示すこと(アクセントが第一音節にある)、8 *tupésan* と9 *sinépesan* がそれぞれ2 *tu* と1 *siné* を内部に含むこと、20 *hót* が名詞であるのを除いてほかはすべて連体詞であること(*tu séta* 「2匹の犬」に対して *hót ne setá* 「20匹の犬」。*hót* は名詞であるから繫辞の *né* をとり連体修飾句をなす)などが注意される。

これらの基本数詞は細部の異同はあるものの、知られているすべてのアイヌ語方言に共通するから²、Proto-Ainu にはすでに出そ

ろっていたと考えるのが適当である。ところが、個々の数詞を分解して語の由来を解明しようという人々がいる。

たとえば、1を示す数連体詞 *siné* (*siné seta* 「1匹の犬」)が二次的に発生した、という説がある。それはほんの仮説にすぎないが、金田一京助、知里真志保が説いたものである。金田一は *si(-ne)* が「大」「真」の“*shi*”に由来し、(*si-*)*ne* は名詞を形容詞化する語尾であると説く³。名詞を形容詞化する語尾とは、上で述べた繫辞の *né* (*hót ne setá* 「20匹の犬」)のことである。知里は“*shi*”には「本」「真」「自身」などの意味があるとしている⁴。*si* の用例としては次のような複合語をあげることができる。

si-annoski 「真夜中」、*si-apekes* 「大きな燃えさし」、*si-pase* 「真に尊い」、*si-kiru* 「身を翻す」 ← *kiru* 「回す」など⁵。

知里が、いわば強調の *si* 「本」「真」のほかには再帰接頭辞の *si-(kiru)* 「自身」(*self*)をあげているのは興味深い。

ところが算術的構造が疑いなく明らかなのは8 *tupésan* (10-2) と9 *sinépesan* (10-1) だけである。そのほかの基本数詞は、*siné* も含めて算術的構造はおろか構成要素の抽出さえ満足にできない。たしかに **これまでも** いろいろな試みがあった。しかしここではそれに触れない。ただ *proclitic* の2 *tu* と3 *re* だけは語源解釈者の手に汚されていないようである。注意しておかなければならないことは、*siné* の二次的派生説の致命的欠陥は「真の」という意味で用いられている *siné* の例を金田一、知里ともに示すことができなかったということにある。いずれにせよ、基本数詞

の分析からえられるこのような仮説は Proto-Ainu 以前の Pre-Ainu に関わることである。

Ⅲ 1 を意味する ár

田村すず子先生の『アイヌ語沙流方言辞典』には

(限られた決まった語に接頭して) 一つの・・・
(一つのを二つに分けた) 一方の / 片割れの・・・⁶

という接頭辞 ar- の 2 つの意味が紹介されている：⁷

-suy 振り (=回数)の単位); *arsuy* 一回。

kewtumu (彼の) 心; *arkewtumu* (彼の) 心の半分 / 片方。 *arkewtumu wen arkewtumu pirka* 片一方の心は悪い片一方の心は良い。

→*oar*, *ear*

ár が 1 を示す例として、十勝地方本別の方言に次のような単語がある。

ar-úkuran 「一晚」 (*tu úkuran* 「二晩」、*re úkuran* 「三晩」。 沢井トメノ 1906-)

このような例は日高・胆振地方に伝承された口承文芸にいくつか見いだすことができる。

ar inau-kike 一本の削り掛け : *ar inau-kike / a-rekuchi-kote* 一本の削り掛けを 私の頸に付けてくれた⁸

ar pakesh 一杯の盃 : *Epontureshi / oripak-an koroka / ouse ar pakesh / akore rusui* お身の小さい妹に 失礼なれど たったひと盃を さしあげたい⁹

at-tam 「一刀」 : *Shirarbetunkur / chiattamnere / aekarkar* シララペッ彦が 唯一刀に切られた¹⁰

佐藤知己さんが世に紹介した『蝦夷言いろは引』(弘化5年、1848年?)には「一盞(イツサン)」に対して *sine tuki* と *ar-tuki* の二つの形があげられ、「一腰」に対して *sine emus* と *ar-emus* の二つの形があげられている¹¹。

なお *ár-suy* 「一回」 が *siné* とともに不特定な時を表す句に用いられることがあることも記しておかなくてはならない。

arasuianita あるとき¹² ← *ar-suy an i ta*

これは次の句とほぼ同じ意味を持つものであろう。

shineanita とある日¹³ ← *sine an i ta*

ár が *siné* とともに 1 を示していたことは疑いがないと思われる。

Ⅳ 「二つ一組の片方」「半分」を

意味する ár

前の節で『アイヌ語沙流方言辞典』から引用して ár に「(一つのを二つに分けた) 一方の / 片割れの・・・」つまり「二つ一組の片方」「半分」の意味があることに触れた。この意味の ár の存在は早くから気づかれていた。知里によれば次のような複合語があるという¹⁴。なお、ár の末尾の子音は弾き音 r (日本語のラ行の子音に相当する) で、後続する子音が歯茎音のときそれに同化ないし異化することによってさまざまな形で実現される。

an-nan 半顔、*an-rur* 山向こうの浜辺地¹⁵、*at-tek* 片手、*at-chake* 対岸、

ar-un-kotan あの世

さらに例を集めると：

ar-moisam 入り江の向こう側の浜（あるいは、岬をなす山の手前の入り江の浜に対して、山の向こうの入り江の浜という意味か？）： armoisam ta / payean yakne 向こう側の浜に 行くと¹⁶

at-tap 片一方の肩： attap kashi / shikush rayochi / attap kashi / ekai rayochi / chieomare 片肩の上には 日光の虹が 片肩の上には 半輪の虹が あって¹⁷

ás-sik 片目： Né áy ani pón yupi sikíhi tukán。 Ássiki isám。 その矢で小さい兄の目ねらうって、片目なくした（日本語訳ともに砂沢クラ 1897-1990 旭川方言）

以上の複合語は、いずれもいわば自然的なペアをなすものの片方を意味している。

次の ár も「二つ一組の片方」の意味と理解すべきであろう。

ár-enko¹⁸ 「半分」： Árenko kuóyra, árenko kuésikarun。 半分忘れたが、半分覚えている（沢井トメノ）

enko は宗谷・樺太方言の éngo (kehe) 「半分」、また、ほかの方言の éngo 「半分」と関係があるだろう¹⁹。そこで、ár-enko は「半分（に分けたもの）の片方」と解釈できる。「半分一つ」と解釈できないこともないけれども。

また『アイヌ語沙流方言辞典』で1の例としてあげられていた

ás-suy (← ár-suy) 「一回」(沢井トメノ。またほとんど の方言でも²⁰)

を tu súy 「二回」、re súy 「三回」と比べる

と、ár は1を意味しているとはか思えないし、また前節でみたように sine an i ta 「あるとき」と並んで ar-suy an i ta 「あるとき」のような例もあり、ますますその感を強めるのだが、回数の単位 suy を副詞 suy 「また」「再び」と関連付ければ、ar-suy は「(再びの) 片方」、「(再びの) 半分」を意味していたことが分かる。したがってこの ár を1を示す例とするのは微妙になってくる。すくなくとも起源的には「二つ一組の片方」であったと考えられる。同辞典では suy が「振り (= 回数の単位)」とされている。おそらくこの suy を他動詞 suye/suypa 「揺する、振る」(単数・複数) と関係付けたものと思われるが、この説は恣意的なもののように思われ、ここでは採らない。

次の例でも ár は「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられている。

at-tem 両手を広げた幅の半分(sine tem 両手を広げた幅。「1間」「1尋」。tem は長さの単位²¹。本来は「腕」の意味。tem-nikor 「腕の輪(の中に入れる = 抱く)」砂沢クラ。tu tem 「2間」、re tem 「3間」²²。)

自然的なペアをなさないもの、等しい二つの部分に分割できないものにも ár が用いられることがある。それは前の節で見たところである。そのような例では、ár は純粹に1を意味するものとなっていると考えられる。

ところで、ár が1の意味で用いられているのか、「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられているのか、あいまいになることがある。我々は久保寺逸彦²³とともに、次の例を見出す。

At-tem pakno / tu-tem pakno / arpa-an ko 一間ほど 二間ほど われ行きでは²⁴

したがって

siné tem, tu tém, re tém・・・

の系列と並んで

át-tem, tu tém, re tém・・・

の系列が存在したと推定される。この át-tem は「半間」「半尋」ではなくて「一間」「一尋」と解せられる。

そのようなわけで、ár は 1 を示そうにも「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味と受け取られかねない場合、またその逆の場合もあったことが知られる。

ここで、金田一、知里説を再び取り上げるなら、ár の多義性の解消への欲求があつて、もともと「真の」という意味であつた siné が ár の 1 を意味する領域に進出したと考えることができるかもしれない。すると siné より前には ár が 1 を示していたということになる。われわれは 1 の意味を担う ár が新興の siné に駆逐されつつあることを口承文芸の中に見るのである。

V 強調の機能をもつ ár

ár はある種の強調を示すためにも用いられる。これは ár の第三の用法である（先にも触れたように siné にはこの用例は全く見られない）。

ar hekachi まったくの子供、ar teinep
まったくの赤ん坊： ar hekachi / ar
teinep / korachi ankuru **まるで子供ま
るで赤ん坊の** 如くなる²⁵

ar herepash はるかな沖へ： ar herepash
/ atui tomotuye / paye-an aine **遙か
なる** 沖合へ 海原を横切り 行き行き
て²⁶

1 あるいは「二つ一組の片方」の概念と、強調の機能との間にはなんらかの心理的な連絡があつたことは疑いえない。これは金田一、知里説に都合のいい事実となる。

VI ár から派生した二つの単語

eár、oár

次に『アイヌ語沙流方言辞典』で示されていた ár の二つの派生語 eár と oár を見ておきたい。

ár に機能がまだよく分かっていない接頭辞 e- がついた eár は、「ただ1つの」という 1 を強調した意味で用いられる。eár が「二つ一組の片方」の意味を示す例、および純粋な強調の機能だけを示す例は見つからない。

ear ay ただ一本の矢： ear ay ari sine
ikin ne upokor humpe ci sirkocotca 私
は**ただ一本の**矢で一度に親子の鯨を仕
留めた²⁷

ear kik ただ一撃： ear kik ne araike
ruwe ne 私は彼を**ただ一撃**で殺した²⁸

earukoiki ただ一つのいくさ： henpara
pakno / ear ukoiki / aki ap kushu /
aoshikonip いつまで **ただ一つ**いくさ
を われらがしてもはてしが つかない
ぞ²⁹

次の副詞は Batchelor の辞典にあるものだが、文字どおりの意味は「ただ一列になって」であるから、1 の概念と強調の機能とが近い関係にあることがよく示されている。

ear-ikin-ne adv. Thoroughly. Well.
Entirely. Quite.³⁰ (ikin←ikir 列。
sine ikin ne 「一度に(←一列になって)」
という句がこの三つ上の例文に出ている)

ekoikian a yakka / earikinne
/ eepokpaan wa / ikiani ka / somone
ruwene 我汝を打ったけれど 全く 我汝
を憎んで やつたことでも ないのだ³¹。

ár に機能がよく分からない接頭辞 o- がついた oár は、「二つ一組の片方」の意味か、強調の機能かどちらかを示す。oár が 1 の概念を示す用例は見当たらない。

まず「二つ一組の片方」の例から。

oar arkehe 片一方の端 : oar arkehe oterke ko oar arkehe hotari 片一方の端を踏むと片一方の端が上がる (火に当たってゆがんだ炬ぶち木の様子。árkehe は ár の自立形だから oár árkehe は「片一方の片一方」ということである。片一方には二つある。その片一方ということ³²

oat cikiri 片足 : oat cikiri otuimaasi oat cikiri ohankeasi 片足を遠くに立て、片足を近くに立てる (飛ぶ鳥を狙って弓を引く情景)³³

次のものは強調の機能を示す例である。

oar teinep まったくの赤ん坊: eani oar teinep ene wa / pon yarpepo ane wa お身は **全くの**赤子であったし 私は幼い女兒であって³⁴

oar apa-eaikap まったくみつからない : Newa tapne / pon awen-yupi / huraha at / apkor humash ko / oar apa-eaikap / ruwe-an どこからか若いわたしの兄さんの匂いがある ような気がしたが **全く**わたし発見できない ことだよ、まあ!³⁵

以上述べてきた eár、oár の意味・機能を ár と対比してまとめると次の表のようになる (参考に siné も表に加えてみた)。

	二つ一組の片方	1	強調
ár	○	○	○
eár	×	○	×
oár	○	×	○
siné	×	○	×

この表から eár と oár が相補的であることが明らかになる。ただし eár が単純な 1 の概念ではなく、強調された 1 の概念を示すことは上で見た。また ár の機能負担量がなかなか重いこともわかる。

VII 1 が 2 より後に成立したという見解

ドイツ青年文法学派の驍将 Karl Brugmann は、印欧諸語において 1 を示す単語に二つの祖形 *oi-no-s と *sem- をたてて、次のように述べている。

Zu dem abstrakten Begriff 'eins' kam man von verschiedenen sinnlichen Vorstellungen aus³⁶.

訳 「一」という抽象的な概念は、いくつかのあい異なる具象的な観念から生まれ

た。

*oi-no-s の示す「一」の概念は、beide「両方の」、alle drei「三つごとの」などと対立する gerade der「まさにその」、nur der「ただその」という表現 (Ausdruck) から生じたとされている³⁷。また、*sem- の語源的な意味は zusammen「一緒に、集まって」とされている³⁸。

泉井久之助は、印欧諸語において 1 から 10 にいたる数詞のうち一致が乱れるのは 1 であって、ある印欧語の 1 は *sem- にさかのぼり、別の印欧語は *ei(no)- にさかのぼるということ述べている³⁹。英語では *sem- は same として現れ、*ei(no)- は one ないし冠詞の an として現れる。さらに泉井は *sem- は「一つにまとめる、集める」という意味を、*ei(no)- は「いくつかのなかから特に一つを抜き出して示す」という意味を持つものだと推定している。

前者についてはドイツ語の *sammeln* などを、後者についてはラテン語の *un-icus* を引き当てている。泉井は次のように述べる。

この事実（数詞 1 に対して *sem- と *ei (no)- の二つの祖形が立てられるということ—切替）は一つの原印欧語域の内部において、〈2〉以上の数詞は各方言域を通じて、すでに共通の表現要素が一貫して行われていたのに対し、〈1〉の数詞についてだけは、その表現要素の定立に、なお選択の余地があったことを示している⁴⁰。

また、「純粹に数詞を必要としたのは「二」からである」⁴¹とも述べている。

我々は、ものを数えるということを当たり前の行為だと思っている。しかし、何にせよ数を唱えながら指折り数えた幼児期を思い起こせば、数えるということが決して a priori なものでもなければ、自然に習得されるものでもない、なかなか高度な技術を要する行為であることに気づく。その行為をラッセルは次のように規定している。

The act of counting consists in establishing a one-one correlation between the set of objects counted and the natural numbers (excluding 0) that are used up in the process⁴².

訳 数えるという行為は、数えられるものの集合と、その過程で使い切る（0を除いた）自然数との間に1対1の相互関係を打ち立てることにある。

ものを数えるためには、支えとしての数詞の体系が成立しているか否かはともかく、1 から始まる自然数の系列が概念として成立していなければならないというのであろう。確かに我々は、1 から始めて1を繰り返し加えればあらゆる自然数にたどり着けることを知っている。この自然数の系列も我々は当たり前のことと思っている。しかしラッセルは言う。

To the average educated person of the present day, the obvious starting-point

of mathematics would be the series of whole numbers,

1, 2, 3, 4, ...etc.

Probably only a person with some mathematical knowledge would think of beginning with 0 instead of with 1, but we will presume this degree of knowledge; we will take as our starting point the series:

0, 1, 2, 3, ...n, n+1, ...

and it is this series that we shall mean when we speak of the “series of natural numbers.”

It is only at a high stage of civilisation that we could take this series as our starting-point. It must have required many ages to discover that a brace of pheasants and a couple of days were both instances of the number 2: the degree of abstraction involved is far from easy. And the discovery that 1 is a number must have been difficult. As for 0, it is a very recent addition; the Greeks and Romans had no such digit.⁴³

訳 現代の平均的な教育を受けた人にとって数学の明らかな出発点は次の整数の系列であろう。

1, 2, 3, 4, ...etc.

おそらくある程度の数学的知識のある人だけがそれが1からではなく0から始まると考える。だがこの程度の知識は前提としよう。次の系列を議論の出発点としたい。

0, 1, 2, 3, ...n, n+1, ...

「自然数の系列」というとき意味されるのは、この系列である。

この系列を議論の出発点とすることができるようになったのは文明がようやく高い段階に

達してからのことである。雉のつがいと二日とがどちらも数2の例であることが発見されるまでには長い年月を要したに違いない。ここで必要とされる抽象化の程度はおよそ容易なものとはいいがたい。まして1が数であるという発見は困難であったに違いない。0にいたっては、ずっと最近になって加えられたものである。ギリシャ人やローマ人はそんな数字は持っていなかった。

ラッセルは、「まして1が数であるという発見は困難であったに違いない」と断定しているが、その根拠は述べていない。また、先に引用したように、数えるという行為が1から始まる自然数の系列の成立していることを前提にしているならば、2の概念があつて1の概念のない文化では数えるという行為が成り立たないことになる。数えるという行為が成り立たないのに、2の概念が存在するというのはどういうことであろうか。説明不足だと思う。そうした欠陥はあるものの、ラッセルの説は有史以前のことを念頭に置いた魅力的な説である。

このラッセルの説とあるいは関係があるかもしれないが、1が数でないということをユンクが述べている。ユンクはそう考える理由を3の象徴性について述べた論文で、中世の哲学者 Macrobius. *Commentarius in Somnium Scipionis*. I, 6, 8. を典拠としつついくらか具体的に説明している。1が2から生じたという考えもここにみられる。

The number one claims an exceptional position, which we meet again in the natural philosophy of the Middle Ages. According to this, one is not a number at all; the first number is two. Two is the first number because, with it, separation and multiplication begin, which alone make counting possible. Jung, C. G. "A Psychological Approach to the Dogma of the Trinity." ⁴⁴

訳 数1は特別な地位を要求するものである。それは中世の自然哲学で再び会うものであるけれど、これに従えば、1は全然、数ではない。最初の数は2である。2とともに分割と増大が始まるからである。分割

と増大だけがものを数えることを可能にする。

これを河合隼雄は次のように敷衍している。

二の象徴性について、ユンクは中世の哲学者の考えを援用しながら、人間にとって最初の数は一ではなくてむしろ二ではないかと述べている。つまり一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ「一」の概念も生じてくると考えられる⁴⁵。

これらの説がもし正しいのなら、つまり、1の概念が2の概念の成立を待って生まれたというのが正しいのなら、árの1と「二つ一組の片方」という二つの意味に新旧の順番をつけることができるのではなからうか。つまり、árはもともと「二つ一組の片方」を意味していたが、後に純粋な1を示すようになったと言えるのではなからうか。冒頭で、数詞1は数2の概念から生まれることがありうると述べたが、それはこのことを指している。さらに想像すれば、1を示すようになった árの多義性を解消するため、同時に、1の概念と強調の機能との間に近い関係があつたことから、「真の」を意味していた sinéが1をも示すようになり、1を示す árはそれに押されて衰え、通り一遍の観察者の目を逃れる程度にしか用いられなくなったのではなからうか。

最後にいささか空想めいたことを記しておきたい。

2と3を示す数詞はあるが1を示す数詞を欠いているような言語はありはすまいか (Pre-Ainu 期の古い時期のアイヌ語はそうだったのではなからうか)。

また、1を示す数詞があるなら2を示す数詞があるが、2を示す数詞がないのに1を示す数詞があるような言語は存在しないのではなからうか。このような implicational universal を見いだすことはできないのであろうか。識者の教示を待ちたい。

- 1 た例えばアイヌ語がそうであるけれど、50
が 20×3-10 として示されるようなとき、
20×3-10 を数詞 50 の算術的構造と呼ぶこ
とにする。
- 2 服部四郎 1964『アイヌ語方言辞典』岩波書
店 260-267
- 3 金田一京助 1935「数詞から観たアイヌ民族」
『金田一博士喜寿記念アイヌ語研究』金田
一京助選集 I 三省堂 1960、 251
- 4 知里真志保 1936『アイヌ語法概説』知里真
志保著作集 1 平凡社 1974
- 5 si が接頭した以上の 5 例の派生語は、切替
英雄 2003『アイヌ神謡集辞典』大学書林よ
り
- 6 田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』
草風館 20
- 7 Dettmer 1989 *Ainu-Grammatik Teil I: Texte
und Hinweise* 791-794 では ar- に関する
諸家の記述が整理され示されていて、参照
に便利である
- 8 久保寺逸彦 1977『アイヌ叙事詩神謡・聖伝
の研究』岩波書店 129
- 9 金成まつ、金田一京助 1959『アイヌ叙事詩
ユーカラ 集 I』三省堂 104
- 10 金成まつ、金田一京助 1965『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 V』三省堂 196
- 11 佐藤知己 1995『「蝦夷言いろは引」の研究
解説と索引』北大言語学研究报告第 8 号、
北海道大学言語学研究室、42 tuki「盃」、
emus「刀」。それぞれシ子トキ、アリトキ、
シ子エムシ、アリエムシと書かれている。
- 12 金田一京助 1923『アイヌ聖典』172
- 13 Ibid 92
- 14 知里真志保 1956『アイヌ語地名小辞典』北
海道出版企画センター 1984、 7
- 15 太平洋沿岸の日高地方からみた、日本海沿
岸後志(しりべし)。石狩地方を指す。rur
「潮」「海」
- 16 金成まつ、金田一京助 1965『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 III』三省堂 41
- 17 金成まつ、金田一京助 1965『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 II』三省堂 65-66
- 18 十勝本別方言。日高沙流方言には
aremko(ho)という形で存在する。田村『ア
イヌ語沙流方言辞典』 21
- 19 服部『アイヌ語方言辞典』 223、 267
- 20 Ibid. 265
- 21 “ Attem, n. Half the distance one can
attain by stretching the arms out.”
Batchelor. *An Ainu-English-Japanese
Dictionary* 61 鷹部屋福平 1941「アイ
ヌ民族の使用したる計量の単位並に音の
名称に関する研究」『北方 文化研究報告』
3、 129-130
- 22 切替『アイヌ神謡集辞典』 400
- 23 久保寺逸彦 1992『アイヌ語・日本語辞典
稿』北海道教育委員会 271
- 24 金田一京助 1931『アイヌ叙事詩ユーカラ
の研究 2』東洋文庫 1931、 795
- 25 金成まつ、金田一京助 1959『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 I』三省堂 198
- 26 久保寺『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』
454
- 27 切替『アイヌ神謡集辞典』 177
- 28 金田一京助 『アイヌ叙事詩ユーカラの研
究 II』 579
- 29 金田一京助 1968『アイヌ叙事詩ユーカラ
集 VIII』三省堂 271
- 30 Batchelor. *An Ainu-English-Japanese
Dictionary.* 100
- 31 金田一京助・金成まつ 1966『アイヌ叙事
詩ユーカラ集 VI』三省堂 340
- 32 切替『アイヌ神謡集辞典』 152 「片一方の
片一方」という解釈はアリュート語学の大
島稔さんが始めに気づかれたものである。
- 33 切替『アイヌ神謡集辞典』 64
- 34 金成まつ、金田一京助 1964『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 IV』三省堂 83
- 35 金成まつ、金田一京助 1963『アイヌ叙事詩
ユーカラ集 III』三省堂 220
- 36 Brugmann, Karl. 1904. *Kurze Vergleichende
Grammatik der Indogermanischen Sprachen.*
Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
363
- 37 ibid, 364
- 38 ibid. 364
- 39 *oi- と *ei- は同じ形態素の交替形。泉井
久之助 1978『印欧語における数の現象』大
修館書店 189-192
- 40 ibid. 191
- 41 Ibid. 192
- 42 Russell, Bertrand. 1919 *Introduction to*

Mathematical Philosophy. New York:
Routledge. 2002. 16-17

⁴³ Ibid. 2-3

⁴⁴ *Collected Works of C. G. Jung*. 11. Pantheon
Books. 1953. Translated from “Versuch
zu einer psychologischen Deutung des
Trinitätsdogmas.” *Symbolik des Geistes*.
Zurich: Rascher. 1948

⁴⁵ 河合隼雄 1977 『昔話の深層』福音館書店
101